

# 十一月作品

## 月集スバル



ゆつくりと終末を舞ふ竹落葉読経のみ声寺より響く  
心臓も骨も脳さへなき水母吾より楽しく生きてさ迷ふ  
眼と耳と皮膚の医院を梯子する賞味期限の切れしわが身は

あかつきの露

福士りか 青森

☆今月の四人☆

五十二年余無欠詠

武田 弘之 神奈川

天牛かきりの背負へる星に一点の乱れあらずと詠みし人はも  
入会后五十二年余無欠詠を通しし君に敵はずわれは  
瘡を病む君とは知らず毎月の短歌添削に応へきたりし  
ひと月も欠かさず歌の添削を頼みきたりし人逝きませり  
「過ぎしもの何」を歌集の巻末の結句としたり君の執念

金色の顔

島田 暉 神奈川

太陽の光をすべて吸ひ込みて向日葵の花金色の顔  
長雨をたまへる悪女の深情け紫陽花の青生き生きとせり

日なたは金、日かげは銀の露のたま秋あかつきの畔道せずし  
腰丈の茶豆畑のその間あひをゆく軽トラは舟のごとしも  
塩引きを今朝は焼かむか盆すぎたわみはじむる稲田ゆきつつ  
みぎ稲田ひだり稲田の正面に「山」のかたちの岩木嶺そびゆ  
をちこちに墓所のある村どの畑はたにも花を植ゑたる一畝のあり

角

風間 博 夫 千葉

地図上の指定地点ポスト探して歩くあるく「オリエンテering」十キロは歩く  
磁石コンパスで方位、歩測で距離を知り次のポストを目指して歩く  
東金の常設オリエンテeringコース歩きぬ妻とふたりで  
妻握りたる握り飯秋晴れの里山のコース歩きつつ食ふ

「この角よ」「いや次の角」諍ひも楽し「オリエンテering」なれば

☆

☆



仲 宗角 三重

風蘭の風にはほへば八十八の末期の水とも心してすふ  
にほふなりヤマボウシの花ゆつたりと事故で入院の山小屋の庭に  
助手席にたたきつけられしその時に特攻の死が火花あげたり  
白々とヤマトタチバナ咲きたる日尾呂志の村は風にまとへり  
ベッドまではこぼれる思ひなし・・・打ちつづけしか

奥村 晃 作\* 東京

水島 晴子 兵庫  
火曜あさ起きぬけに飲むいちぢやうのくすりをつつむピンク色爰し  
雨おほき夏をはりがたゑのころの穂に満ちてをりあをきちからは  
寝台の鉾かがやかす夕ひかりけふの茜のここにとどまる  
灰かぶり娘ではなく灰かぶり婆あぞつねに灰いろの服  
へしばらくはどれ程の時間 もう暫くもうしばらくと眩きながら

杜 沢 光一郎 埼玉

敗戦後七十四年の夏にして戦争を知らざる世代八十三パーセントとぞ  
ぼつねんと黙して一人ゐるわれに気づきよことさらな先咳をする  
歴代住職の位牌並べをへし供養棚に新盆の白き提灯も飾れり  
亡き妻の白木の位牌を黒檀の本位牌に直しお盆迎ふる  
独り言多くなりきて妻の遺影に「ねえ然う思ふだろ」などつけ足しする

高野 公彦 千葉

歌を詠む、食べる、飲む、寝る 現し世に生きてゐる間は楽しくをあらな  
歌びとと酒を飲みつつ無駄話して笑ひ合ふわが一壺天  
旧カナのルビ(せいろぐわん)玉かざる日露戦役の軍靴のひびき  
歩きスマホ、座してもスマホ しんしんとスマホの中で暮らす人々  
年取れば脳の誤作動起きやすくエンヤ聞きつつ晶子を思ふ

森 重 香代子 山口

人の声聞かず過ぎたる日の夕べすずめと蝶と庭に来てをり  
背戸山に沈む夕陽がはろばろと周防の灘の沖にきらめく  
のぼりくる海風のなかなかなの声する谷地の夕かげるころ  
箒もて出でて来し庭夏萩の白ほつほつと咲きそめてをり  
こつこつと樹を噛む音す葉さぐらのいづこか禽の夕ごもりゐて

日影 康子 富山

外出をせずなりし夫の腕時計持ちきて街に電池入れ換ふ  
怪奇絵を見し美術館のにぎり池太き真鯉がゆらり近付く  
猛き草引きつつ寺の墓地に聴くつくつくほふし今朝の初鳴き  
籠り居のつづく猛暑を静謐に夫は嘆かず怒ることなく  
洗ひさらし薄くなりたる古タオル愛して使ふ平和よつづけ



狩野 一男 東京

嚴重に警戒すべし老いらくの恋の行方と迫る台風  
五反田で診察受けて三鷹台で薬をもらふ令和となりぬ  
駅近にえだまめ保育園できて、令和最初の夏を言祝ぐ  
敗戦忌過ぎて切なしふるさとの八十一の姉をおもへば  
自らを良く知る我はみづからの死への備へを何一つ為す

宮里 信輝 神奈川

フツ化水素、レジスト、フツ化ポリイミド困惑しをり日、韓の間で  
フツ化水素、ホワイト国またGSO M I A 今年の「流行語大賞」に押す  
ステルスのF35B、イージス・アショア トランプより買ふ日本の平和  
ステルスのF35B一機にて140億円「平和」は高い  
心、体がひまはりとなりゆけるなりひまはり畑の迷路に迷ひ

岡崎 康行 新潟

窓の外に押し寄せてくるあらくさの好きなるままに茂らせてゐる  
家とともに得たる小さな庭なりきそれから四十年の老人と庭  
二、三年杉菜の原である庭に雌日芝の波襲ひ被さる

旅の途次われは見たりき被はれてこゑなく藤に締めらるる小屋  
廃屋も耐へてゐるべし住まはれず毀されずただ「在ること」のみ

小島 ゆかり 東京

梅雨の間を堪へて梅雨明け堪へきれず歯が痛し鳥医院へ行けり  
七月の蟻螂たむらうに似て歯科医師は若やかにピンセットあやつる  
夫妻なる医師二人をり裏口に子のこゑもする鳥歯科医院  
口あけて治療受けゐるしはらくを遠き思ひ出の海がしぶける  
治療後のうがひするとき甘苦あまにがし六十二歳の夏の血の味

古屋 祥子 群馬

さらばへて生きたくはなしされどなほ人の愛あり、しんせつは受けよう  
目が不自由、耳も不自由、人生の途中失明者点字習ふと  
橋むかう仕掛火花が弾ぜ継げり樹々連なるをなほぬきん出で  
打ち上ぐる火花がまとふしろがね光 宇宙の果てに神いままさんか  
戦中も戦後も辛く生き伸びし故に「粗末なる生」許されず

影山 一男 千葉

流行に一步遅るる神保町タピオカティーの店ひとつ増ゆ  
点滴を受けつつスマホ繰る人の弥勒にあらぬ横顔白し  
イヤホンの白き異物を光らせて歩む令和の日本人たち  
スマホするのはいいけれどお嬢さんあなたの肘がぶつかつてます  
枝ゆらし房花ゆらし百日紅ゆきあひの風に花すこし散る

桑原 正紀 東京

空はまだ夏なれど池の照り返すひかりに秋の色ひそみたり  
この池の鯉も老いしかくろがねの体のはつかに金色を帯ぶ  
ゆるやかに鯉ひるがへり体側のうろこの幅の光すぎたり  
十年前妻が投げたるパン食べし鯉か覚えのある緋紋様  
ひとり来て池のほとりにおもひをり鯉の十年、われの十年

木 畑 紀 子 京 都

憶えある歌に会ひつつ「葦の花咲く」を読みをり関口さんの忌  
わが歌のはじめに姉のやうなりし関口さん逝き三十五年  
学ぶうた働くうたを畏れつつ読みなき三歳年下のわれ  
添削の跡を学びて「コスモス」を校正する歌つつしみて読む  
啼きしきるセミのかたへを音もなくトンボめぐれり有縁とおもふ

大 松 達 知 \* 東 京

生まれたる日は水曜日ゆびさきを五センチ四方うごかして知る  
いよびと 家人は軍上層部ではなきに、いのちをかけて進言をせず

グンカンと呼ぶほかなくて呼んでいる嫌な感じは食べば消えたり  
やわらかく煮ています。すべて食べられます。(耳石は取り除いてください。)  
はつらつと学生どうし話す良し漢語ウユなればわからないけれど

田 宮 朋 子 新 潟

帰り来しわれにとつぜん夫は告ぐその脊髄に腫瘍があると  
立ち寄れるヨゼフ氏一家もてなしぬ気がかりひとつ胸に沈めて  
三尺玉鳴りとよもせど余所事かなにかのやうに虚ろにひびく  
赤、緑、金の花火は爆ぜをれどひかり失せたる動画のごとし  
黒雲はひとまづ去りてわが夫の骨の腫瘍は悪性ならず



津 金 規 雄 神 奈 川

真夜に見る映画「ジュリアス・シーザー」のギールグッドの鼻の隆さよ  
CGなき時代の巨編「クレオパトラ」大スクリーンの壮観憶ふ  
行く末をあやまたず知る者は強し「奇跡の丘」のイエス雄弁  
「七人の侍」を見る 士も農もみなよく走る、ひたすら走る  
国策映画「翼の凱歌」はふんだんに「隼」飛行のさまを記録す

小 山 富 紀 子 京 都

見開きて死ぬのか閉ぢて死ぬのかと八月の眼を鏡に見つむ  
生き足りぬ生きたりぬよと蟬が鳴く三十五人のたましひのごと  
鳴ききれず死にたる魂はあまたあるあまた集ひてなにかありさうな夏  
かなしきことあれば必ず墓へ行きざんぶざんぶと水を注ぎぬ  
わが逝けば無縁となれる墓ゆゑに心をこめて今をみがきぬ

清 水 正 子 神 奈 川

みちばたのバラソル屋台まだ見ない横浜ハマの七月降りみ降らずみ  
ゆらりゆらドックの潮に花の如みづくらげ浮きて何か思案げ  
みづくらげドック脱出のしほごきを待ちてゐるらしゆらりゆらりと  
魔女のごと指パッチンす製鉄のスラグおもはせる雲消したくて  
「美濃吉」でお昼いただき横浜ハマ歩き楽しみぬ術後いちねん振りに

小 嶋 一 郎 佐 賀

微分積分習ひ六十八年が過ぎてめでたし役立つなくて  
道草を食ふすべ知らず黙々と兎らは舗道の端をば歩む  
内科医が眼と歯も診るは何ゆゑか聞く程のこと無けどわりなし  
膀胱が弾力性をうしなへば頻尿となる、さうかなるほど  
日に三度忘れず飲みしはずなのに不思議に二錠残る七日目



後藤 美子 北海道

先行きの八十倍はあらむ過去ためらはず詠はん今のおもひを  
階段を上り下れば古びたる骨、筋肉が声なくきしむ  
もう行けぬ場所あまたありそのひとつ夏の盛りの雨竜沼湿原  
白壁の(後藤会館)焼け失せぬ幼きわれの記憶と共に  
気ままなる生を重ねて八十路越ゆぜいたくならん悔いなど言はば

藤野 早苗 福岡

ギヤップ萌えたとへて言はばゴルゴ似の浜嘉之氏お料理上手  
饒舌をいましめるごとく素描せる画家この人の線とは言葉  
かの国の日本製品不買の報聞朝の庭ムクゲ咲きをり  
放埒のとき過ぎにけり八月の梅の徒長枝剪定されて  
舗道に拾へる羽根の濡れ羽色虹の記憶ををりをりひらく

田中 愛子 埼玉

ホームより戻りて母が仏壇に長さ不在を詫びる盆の夜  
「家はいいね」小さく母はつぶやけり花火を網戸越しに見上げて  
シルバーカー押す母の背にどこよりも早く初秋の風は来るなり  
読む前にもう疲れたり全一卷『ナボコフ全短篇』は厚くて  
猫カフェのある裏通りしづかなり定休日多き水曜日けふ

橘 芳 園 新潟

寺の子が金閣放火犯なりしこと寺の子われの衝撃なりき  
焼かれねば在り続けぬし金閣が焼かれしものとして在り続けぬる  
観光僧観光寺院のはびこるを予見してゐき青年僧養賢  
金閣の屋根の鳳、ノートルダム尖塔の風見鶏焼けのこりたり  
北朝鮮人民のうたふ抵抗詩いま少し長く生きて読みたし

水 上 比呂美 東京

ウルシ科のマンゴーの花黄の小花虫に花粉をはこばせる花  
包み紙ひらきて堅き箱あけて薄紙めぐりてマンゴーふたつ  
マンゴーのうはかは暗き瑪瑙いろシエヘラザードの見し寝待ち月  
マンゴーのひとつひとつに木筒が入つてゐます懸想文、呪符  
完熟のマンゴー十日経て食みてくわんじゆくじゆくの美味しさに会ふ

鈴木 竹 志 愛知

何ゆゑに十三人がいちどきに処刑されしか未だに分からぬ  
権力のときをり見する恐ろしき貌の一つが去年の処刑か  
聡明な弟子たちは賢明な弟子にはあらずして信仰に死す  
狂ひしか狂ひしふりを貫きて処刑されしか松本智津夫  
弟子たちを救はむとする意志はなく教祖は黙し闇に消え去る

原 賀 環 子 東京

ワンピースのヘムの繕ひボタン付け半年ぶんを一気にやらう  
秒刻を身に感じをり。ぬひ糸とぬひ針の穴つながらぬとき  
ながつゆの汗じんわりとからころも針仕事とはすべて手仕事  
針穴の発明によりにんげんは(着る)を育ててモードを生めり  
ゴミ袋に三つ四つの服といふ寡婦十年の友の断捨離

水上 芙季 東京

吹く風もわれも湿り気帯びてゆき流れる雲の下を帰りぬ

壮大な黒雲調布の空を行き三蔵法師に会ひさうな夜

焙煎の香り何度も鼻かすめ風強まつてゆく台風前夜

台風が呼ぶは幼きわれと姉神社のやぐらで盆踊りせり

台風の中継は今も変はらない「立っているのがやつと」と言ひて

大野 英子 福岡

広島の、長崎の原爆記念日のところが痒い首相スピーチ

想像力欠如かただの厚顔か A B E の舵取るニッポンこはい

（しんぞう）と入力すれば晋三が出るわがパソコン何かがゆがむ

世界中火種だらけのきな臭さ雷雨の止まぬ令和はちぐわつ

ふるはせてああと鳴くこゑまだ若き鴉は蟬声湧く木立陰

松尾 祥子 東京

じーんじーん耳のおくがの鳴りやまぬ酷暑の夏よ華甲ちかづく

歩き方講座で学び肩さげて内臓あげて駅前を行く

本棚の本にかこまれうたた寝し真夏のライン川くだりゆく

緑陰に汗をぬぐひて一杯の水を飲むこの星に湧く水

ゆふぐれをほのか明るむほほづきよ草花は嘘をつくこととなし



桑原正紀歌集 令和元年9月刊 一六〇〇円(税別) 送料三〇〇円

秋夜吟 コスモス叢書第1166篇 青磁社

著者住所 〒173-0037 東京都板橋区小茂根三一九-八一〇六

木畑紀子歌集 令和元年7月刊 二七〇〇円(税別) 送料三〇〇円

かなかなしぐれ コスモス叢書第1157篇 現代短歌社

著者住所 〒610-0357 京都府京田辺市山手東一-二二-二〇

大野英子歌集 令和元年9月刊 一三〇〇円(税別) 送料三〇〇円

甘藍の扉 コスモス叢書第1159篇 柘書房

著者住所 〒812-0028 福岡県福岡市博多区須崎町三一六-三〇二

島田暉歌集 令和元年9月刊 一六〇〇円(税別) 送料三〇〇円

記憶の炎 コスモス叢書第1162篇 角川書店

著者住所 〒246-0015 横浜市瀬谷区本郷一-一四-一六